
Chaos_Mythology_Online

アマノガサ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Chaos | Mythology | Online

【Nコード】

N8274Y

【作者名】

アマノガサ

【あらすじ】

通常のMMORPGと互換性を持って発売されたVRMMORPGのクリアタイトル”Chaos | Mythology | Online”。その日、大鳥圭介は行きつけのアクセスポイント喫茶からゲームへログインしていた。いつもの仲間と過ごす楽しい時間。しかし、それは唐突に終わりを告げる。ボスモブ討伐直後に急激なめまいに襲われた圭介は意識を失い、次に目が覚めたときにはゲームの世界に囚われてしまっていた。意識のない間に過ぎ去った空白の一ヶ月。ログアウトが出来ないという現状。今までのゲームと若

干異なるリアル感。そして、いつの間にか変更されて”黄色表示”
となった頭上のネーム群。不可思議な事だらけの中、圭介はプレイ
ヤー『鳳牙』として仲間と共にCMOの世界に、そして自分たちに
起こった謎を追う。仮想と現実、双方の苦難が行く先に立ち塞がる
事も知らずに。

序章

序章

「ヴオオオオッ!!」

眼前の巨大な漆黒の狼の放つ咆哮が耳朵を打つ。

ビリビリと感じる空気の振動。五メートル級以上の獣族モンスター

―固有スキル、気絶^{スタン}効果を持つ獣^{ビースト}咆^{ロア}だ。効果範囲はモンスターによ

ってまちまちだが、今回は相手を中心とした半径六メートルほどま
で効果が及んでしまうらしい。

「ぐおっ……!!」

十分な距離をとっていたつもりだったのだろう。鈍色の西洋鎧を
着込む剣士は驚きの声を漏らして片膝をつき、その背後で僧服姿の
女が腰を抜かしてぺたんと座り込む。

「くっそ! 何でこんな所にフェンリルシャドーなんて出てくるん
だよ!」

何とか体勢を立て直した剣士の、声からして男は、震える手で両
手剣を構えなおす。

幅広のグレートソードは実用性と見栄えのよさから両手剣士に好
まれる汎用装備だが、その重厚な存在感も目の前の凶獣に対するに
はあまりにも心許ない物だった。

剣士はちらりと背後の様子を探る。腰を抜かした僧侶はまだ立ち
直れていない。

敵とのレベル差のせいもあるが、僧侶は剣士に比べてスタミナをST
消費する物理系^{フィジカル}スキル^{スキル}に弱い。見た目はマナポイント^{MP}を消費する魔法^{マジック}
系^{マジック}スキル^{スキル}のよう^{ツク}で、獣咆は前者に属していた。

「ミリア! 回復までどれくらいかかる!?!」

「ごめんキール! 気絶ゲージまだ半分以上も残ってるの。全然動
けない!」

半分以上という言葉聞いて、剣士 キールの胸中に絶望が宿る。自身が立ち直るまでに要した時間から計算しても、それはあまりに長すぎた。おそらく、物理系に弱い相手に対する特殊効果が付与されているのだろう。

僧侶 ミリアの支援をあてにできなくなったキールは、急いで自分の持ち物を確認する。

自己回復用のヒールポット^{POT}を持つてはいるが、これは使用後にクールタイムが存在するため連続使用が出来ない。

戦闘開始直後の不意を突かれて受けたダメージは、たったの一撃でキールのヒットポイント^{HP}を三分の一も奪い去った。ミリアの回復魔法であれば二回で全快出来るが、ポットでは三回は使用しなくてはならない。

ジリ貧は必至の展開だ。

このままでは共倒れになると判断し、わずかな逡巡の末にキールは自分を囷にミリアを逃がすことを選択した。

「ミリア！ 俺が何とかこいつを引き付けるから、君はその間に逃げてくれ！」

覚悟を決め、キールは大剣を背負うようにして構えて漆黒の巨狼に突撃を仕掛ける。

「キール！？」

背後からミリアの悲鳴が聞こえてくる。何とかして、彼女が気絶から立ち直れるだけの時間を稼がなければならない。

デスペナルティはそれなりに痛い、最悪ソロでのレベル上げが簡単な戦士系である自分の方が取り戻しやすいだろうという判断だった。

「うおおおっ！」

キールは巨狼の眼前で急制動をかけ、前へとつんのめる勢いをそのままに背負い構えていたグレートソードを一気に振り切った。

「ヴォッ！」

ザシュッ、というヒットサウンドと剣閃をイメージしたエフェク

トが生じ、巨狼のヒットポイントゲージがわずかに減少する。

「げっ！ 『地割』^{ちかつ}使ってこれかよ！ 洒落にならねえ！」

『地割』は現在キールが使えるスキルの中で最大の攻撃力があつた。だというのに、それをもつてしても毛筋ほどのダメージしか与える事が出来ない。

本来であればこのフィールドにいるモブ^{mob}はキールの『地割』一撃で倒せるはずだったのだ。下見の段階でおおよそのモブと戦闘を行い、無理なく捌けると判断したからこそ、キールはミリアとのレベル上げにこの場所を選んだのだ。

だというのに、ポップ^{pop}するはずの無いモブが突然襲撃を仕掛けてきて、今の状況へ繋がっている。

「ぐあっ！」

それでも多少なりともいける可能性を期待していたキールは、最大の一撃がまるで通用しないことに動揺し、フェンリルシャドーの反撃をまともに受けてしまう。

大きな前足に払われ、地面を転がった。

「いやあっ！ キール！？」

ミリアの悲鳴が聞こえる。駄目だ、助けなければ。

軋む体に鞭を打ち、キールはグレートソードを杖代わりに立ち上がって、ふと自分の上に影が差したのを感じた。

嫌な予感と共に見上げれば、そこには大口を開けた巨狼の姿。なおかつその口の中に炎の塊が生じているのが見える。

「やべ、火炎の息か！^{フレイムブレス}」

先の獣咆と違い、火炎の息は純粹な魔法系スキルだ。剣士であるキールとはすこぶる相性が悪い攻撃である。

「悪いミリア！ 俺死んだわ！ 何とか逃げ切ってくれ！」

「キール！」

覚悟を決めた剣士キール。その名を叫ぶ僧侶ミリア。二人の死は免れない状況。

そのはずだった。

「どこかの映画のワンシーンみたいな状況だよな」

「……え？」

キールはどこかのんびりした口調の声を聞いて、思わず周りを見渡した。直後、

「ギャンツ！」

大砲をぶつ放したかのような轟音が鼓膜を震わせたかと思うと、目の前にいたはずの巨狼が犬みたいな悲鳴を上げて吹っ飛んでいくさまを目撃した。

キールがあまりの状況に呆然としていて、その目前に急に人影が降ってきて、彼は反射的に間合いを取った。

武器を構えつつ、目の前の人影を観察する。

身長は百八十センチで設定しているキールよりもやや低い。服装として、上は薄手の黒いノースリーブ。背中側は布面積が少なく、大きく肌が露出している。下は改造された黒い袴のようなズボンで、紅とオレンジのファイアパターンがアクセントになっていた。両前腕には手甲か何かの上に黒布が巻かれ、左上腕には赤味がかった金色のリングを付けており、背後から見た髪の色は銀色をしていた。

しかし、特筆すべきはそんなものではない。

「え？ いや、まさか……」

キールの視線は二つの場所を行ったりきたりしている。

一つ目はその綺麗な銀髪にそびえる二つの耳。いわゆる獣耳というやつだ。ピンとたった二つの耳は、何かに反応するように時折びくびくと動いている。

もう一つはその腰の辺り。髪の毛の色と同じ銀色の毛を持つふさふさの尻尾。それがパタパタと左右に揺れていた。

「あんたもしかして」

極めつけはキャラの頭上に表示される所属ギルドとキャラクターネームの黄色い文字色。

その特徴的な風体から、キールは一つの名前を思い出す。

「イエローネーム 黄色表示、ぎんろう 銀狼の鳳牙か!？」

「……だつたら、何？」

ゆらりと振り返った獣耳の男性キャラクターは、その銀色の瞳を半目にし、ややうんざりしたような表情をしていた。

その1

第一章

二十二世紀の終わり頃、アメリカから輸入した技術を応用し、日本で人類史上初となる仮想世界、ヴァーチャル・リアリティ・ワールド（通称VRW）が構築された。

現実世界の東京都をまるまる模したその世界は『裏東京』と仮称され、専用の機器を利用することであたかも本物の世界であるかのように様々な現象を体感する事が出来た。

脳科学の発展によって人体の五つの感覚全ての仕組みが解明され、デジタル化することに成功していた事が最大の成功要因だ。

人々は現実世界に限りなく近い生活を、仮想世界でも行えるようになった。

時が進み、VRが一般大衆にとって当たり前の存在となった頃、ゲーム業界がこの仮想世界に目を付けた。

現実世界を模した世界はその莫大なデータ要領からとんでもなくコストがかかってしまうが、必要最低限の見ため（ハリボテ）が実現すれば世界として成り立つゲームにおいて、この懸念は何の制約にもならなかった。

インターネット上で普及するMMO-RPGをはじめとするネットゲームとVRが結びついたのは、必然と言ってよかっただろう。

VRを用いたネットゲームはたちまちのうちに大ヒットを飛ばし、日本各所でVR機器を設置した漫画喫茶ならぬAP喫茶や、VR機器完備のビジネスホテルが大流行した。

金銭的に余裕のある者の中には自宅にVR機器を設置して利用するものもいたが、大方の利用者はスペース的な問題も含めて外部に機器の設置を求めた。

おおとりけいすけ
大鳥圭介もそんな大勢の一人だ。自室にVR機器を設置する余裕

などあるはずもなく、ゲームの記録媒体である専用カードだけを持ち歩くほうが気楽だった。

加えて、特定のアクセスポイント喫茶は各ゲーム企業の出資で経営されているため、食事などを利用しなければ基本料金が無料というありがたい状態だった。ただし、当然ながら該当企業のVRゲーム利用者に限ったのである。ただ寝るためなどの利用は認められない。

圭介は行きつけのAP喫茶に立ち寄り、手続きを経て個室へと至っていた。

昔のSF映画に出てきそうな冷凍睡眠カプセルを思わせるVR機器。

圭介は慣れた手つきでVR機器の上部カバーを開け、中に納まっているリクライニングに腰掛ける。同時にカバーが閉じられて一切の光が届かなくなるが、すぐに周辺機器が鮮やかな色合いで発光を始めるため、光量としては十分だった。

右手のタッチパネルから”Chaos | Mythology | Online”のアイコンを選択してタップすると、CMOというロゴが表示され、ログイン画面へと移行する。

圭介はパネル下部のスリットにカードを差込むと、配線だらけのヘッドマウントを被り、手はリクライニングと一体になっている専用のポケットに突っ込んだ。

そのまま目を閉じてゆったりとした姿勢で待つ。数秒の後、ピリツとした痛みが全身に走ると同時に、圭介は爽やかなそよ風をその身に感じた。

目を開けばそこは、狭いVR機器の中などではなく、見渡す限りの広大な草原の真っ只中だった。

「ああ、それで鳳牙はそんなところにいたってわけか」

「そういう事です。最後にログインしたのがテスト前で、みんなとイベントやった後でしたから、ちょっと忘れてました」

圭介　鳳牙は、酒場の椅子に腰掛け、目の前のグラスの中身を
あおった。酸味の利いた爽やかな柑橘系の味が口の中に広がる。

新製品という事で頼んだものだが、なかなか好みの味だった。鳳
牙は思わずパタパタと尻尾が振る。

「鳳牙はリアルだと高校生だもんな」

鳳牙の隣に座るのは、金色の糸で魔力文字の刺繍が施された丈の
長い純白のローブを着込む青年だった。今は座っているが、立った
時の身長は鳳牙と大差が無い。翡翠色の髪の毛に黄色の瞳をしてお
り、鼻の上にスクウェア型でアンダーリムの眼鏡を引っ掛けている。
実に優等生然とした出で立ちであった。

「で、学期末テストの具合はどうだった？　僕が張ったヤマは当た
ってたかい？」

「はい、フェルドさんに教えてもらったところはバッチリだったか
と。英語が相変わらずでしたけど、赤点ではないと思います」

翡翠髪の青年　フェルドは都内の大学に通う大学生一年生であ
り、鳳牙の高校のOBでもあった。恩師がまだ教鞭を執っていると
知ったフェルドが、テスト勉強に悩む鳳牙に策を授けたのである。

「そっか。という事は、村やんのテスト傾向は未だ伝統に沿ったま
まってことだな」

「そうみたいです、ね」

鳳牙はぐーっと腕と身体を伸ばし、しばらくキープしてから脱力
してカウンターに寄りかかった。

ややささくれた木の感触が頬を。塗られた二スの香りが鼻をくす
ぐり、頭でいくら理解していても、それが現実ではないという事を
忘れてしまいそうになる。

ゆっくりと身を起こして周囲を見回せば、西部劇に出てきそうな

内装の店には鳳牙とフェルド以外に人影はなく、椅子は全てテーブルの上に逆さまに乘せられていた。

「しかし、この酒場はいつも寂しいですね。近くにいい狩場も人気のボスモブもないせいなんでしょうけど」

「そうだね。VRログインをしてない人とか、複数アカウントログインしている人の放置露店キャラもないってところが、もうなんともね」

鳳牙は無言で頷いて同意を示す。

この閑古鳥は何も酒場に限った事ではない。現在位置の『月森の町トリエル』は隣接するフィールドへの冒険の拠点となるタウンエリアなのだが、その隣接フィールドの人氣が無いために誰もいないのである。

「まあ、そのおかげでギルドに入っていない俺でも雑音を気にせずゆっくり会話出来るんですけどね。ギルドチャットも便利そうですけど、あれって旧来のチャットウィンドウみたいなのが開いて音声会話するんでしたっけ？」

「うん。そのウィンドウを選択しているかいないかで自分の通常音声チャットとギルド音声チャットを使い分けるんだ。大体の人が普段はウィンドウを開きっぱなしで音声だけカットしてるみたいだね。ちなみに、僕もそうしてるよ」

フェルドが鳳牙から見て何もない場所を指で示している。つまりは、そこにウィンドウを置いているという事なのだろう。

ゲームを始めてから一度もギルドに属したことのない鳳牙にとっては、完全に未知の代物である。

「でも、ギルドの話なんてどうしたんだい？ 鳳牙。もしかして、僕んとこのギルドに入る決心がついたとか？」

「あー……いえ、毎度毎度ですみませんけど、やっぱり俺はギルドに入る気は無いです」

鳳牙が苦笑いを返すと、だよねえとフェルドがわざとらしく肩を落とした。

ふと、鳳牙はフェルドの頭上に表示される白字のネーム群を眺める。二段構成になっており、上段が所属ギルド名『アルメリア騎士団』。下段がキャラクター名『フェルド』だ。

アルメリア騎士団はCMO古参ギルドの一つで、登録人数が二百人を超える大所帯ギルドだ。丁寧な初心者支援をするギルドとして有名で、直接的な関係がほぼ無い鳳牙もソロ活動中に何度か辻回復魔法や辻蘇生魔法を受けた事がある。

「あの一件以来、僕んとこのマスターから鳳牙をなんとしても引き入れてくれて結構な頻度で催促がくるんだよね。本人にその気は無いですって何度も言ってるんだけど、ほら、鳳牙は元々『リミテッドスキル』持ちだったのに加えて唯一のレア職業キャラになっちゃってるからね」

「フェルドさんもしリミテッド持つてるじゃないですか。レア職業はイベントの褒章品で、偶然なれただけです」

ぽりぽりと、鳳牙は人差し指で頬をかく。

「ためしにつて『獣人』ライカンスロープに転職したのはよかったですけど、VRプレイヤーにとっては本来の自分じゃない物が付加されてる分、最初は感覚の違いに慣れるのに時間かかりましたよ」

鳳牙はぴくぴくと頭の上についている獣耳を動かしたり、ふさふさの毛を持つ尻尾をパタパタと器用に操ってみせる。

実のところ、鳳牙はこれらの自然な動作を習得するのに二ヶ月近く時間を使っている。上手くコツを掴んで以降は違和感なく操れるようになったので良かったのだが、今では現実世界にいるときでもふとした拍子に無いはずのものを意識している事があり、幻肢に近い感覚を持っていた。

「もつとも、もう一個の能力の方に比べたら、尻尾くらいわからないと思えましたけどね」

「ああ、あれね。うちの女性ギルメンに絶大な人気を誇ってたよ。何か『裁縫師』とか『宝石細工師』にチョーカージュエルメイカーの作成依頼に走ってた人もいたから、誘拐されないように気をつけてね？」

「俺は犬じゃなくて狼なんですけどね」

「いや、そういう話じゃないから。まあ、誘拐云々は冗談なんだけどさ」

あははとフェルドがやや渴いた笑いを漏らす。

「ま、とにかくにもテストは終わったってことだもんね」

「はい。えっと、そういうええ一週間ぶりですか？　こうやってフェルドさんと話すのは」

「うん。それくらいかな。……あ、マスターさっきの二杯お願いします」

ニコニコ顔で頷くフェルドがカウンターの向こうにいる強面のバーテンに声をかけると、すぐさまグラスが鳳牙とフェルドの前に出される。

「え？　フェルドさん？」

「思いつきだけど、試験終了祝いつてやつだよ。好みの味だったんだろう？」

自分の分も注文されたことを不思議に思った鳳牙に対し、フェルドは片目をつぶってウィンクをしてくる。

「ま、一応君って僕の後輩なわけだし、おごらせてもらおうよ」

「あ、なるほど。それじゃあ、せっかくなんで遠慮なく」

鳳牙はそっとグラスを持ち上げ、顔の位置に掲げてフェルドに向き直る。

それを確認すると、フェルドも同じようにグラスを掲げ、コホンと咳払いをする。

「えー、無事にテストを乗り越えた鳳牙と」

「あ、えーっと、助力を惜しまなかったフェルドさんとの」

「「再会を祝して」」

チン、と小気味いい音を立てて二つのグラスが打ち合わされ、互いに一息に中身をあおる。

「……ふー。うん、これ確かに美味しいね」

「そうですね。普通、渋みというか苦味があるはずなんですけど、

これはすごく爽やかな後味なんですよね」

味覚のデジタル化によって、仮想世界で食べたり飲んだりする物はたとえゲームであっても味が再現され、直接楽しむ事が出来るようになってる。

ただし、あくまで感じるだけで空腹を満たしたり栄養の補給などが出来るわけではない。

「下手に仮想世界でうまい物食べると、リアルに戻った時にショックだよな」

「ああ、それ分かります。でも、こっちはいくら食べてもお腹膨れな」

『ハローおはろーこんにちはこんばんはおはようございまーす』

突然、鳳牙の言葉に被って元気な女の子の声が直接頭の中に響いてきた。

特定の相手に声を届ける【ささやき】という会話機能だ。複数名にも設定できるため、その声はフェルドにも届いたようだった。彼は苦笑しながら肩をすくめている。

『なんですよ。鳳兄ほうにいログインしたんなら教えてくださいよね。今日こそボスからレアアイテムドロップさせるんだから。って、そう

いえば今何処ー？』

『相変わらず元気そうだな、小燕。シャオイエン今はトリエルの酒場でフェルドさんと一緒だよ』

チャット設定を変更して、鳳牙も小燕に【ささやき】を返す。

『おー、フェル兄も一緒かー。あいさー。十分くらいで行くから待つててちよーだい』

『分かった』

通信が終わり、鳳牙はチャットの設定を元に戻した。

「小燕が十分くらいで来るそうです」

「うん。じゃあ、後は」

「拙者をお探しか？」

「「うおあっ！」」

突如天井から逆さまに生えてきた黒装束に驚き、鳳牙とフェルドはそろって椅子から転げ落ちた。

「うぬ。すまぬで御座る。『^{きうほし}煌星忍軍』の報告会を終えてすっ飛んで参ったので御座るが、少々驚かせ過ぎ申したか」

しゅたつ、と腕を組みつつ床に降り立つその姿は、一部の隙もなく一目見て忍者と呼称せざるを得ないものだった。

ただし、筋骨隆々ではち切れんばかりの巨体をどうにかこうにかぴっちぴちに収めているという、何かの冗談のような状態だったが。「鉄馬^{てつま}！ お前わざとやってるだろ！？ 何をどうすっ飛んでくれば天井から生えてくるんだ！」

床に尻餅をつきながら、フェルドが筋肉忍者に対して怒りをあらわにしている。現実世界で二人は同じ大学に通う友人同士なので、普段は物腰の柔らかいフェルドもことこの忍者に対してはかなり素が出てしまう事がある。

「フェルド殿。今の拙者は鉄馬では御座らん。アルタイルで御座る」装束から唯一見える青い瞳が、不平を伝えるようにわずかに細まった。

「あ、ああ悪いついいつもの調子で　　って、そうじゃなくてだな……」

「アルタイルさん、その巨体で忍ばれて驚かされると、ちょっと心臓に悪いです」

フェルドがなんと云ったものかと悩んでいるのを見て、鳳牙が助け舟を出す。普段から気心が知れていればこそ言い方に悩む事もあるのだらう。こういう場合は他人から言った方が効果的である。

「うぬ。鳳牙殿がそう言うのであれば、今のような登場は金輪際止めておくで御座る」

アルタイルががっしりした腕を組んだまま鷹揚に頷いた。

「ところで、今の天井から来たのってもしかして『壁歩き』ですか？ 忍者のマスタースキルの」

「うむ。鳳牙殿がテストの間、フェルド殿に付き合ってもらって忍

びの里の首領と一騎打ちをし申してな。見事忍者のマスタースキル解放と相成ったわけで御座る」

アルタイルがボディービルダーのようなポージングを取る。伸縮性に富む素材のはずの黒装束がみちみちと悲鳴を上げているような気がした。

「へ、へえ。『壁歩き』って天井も歩けるんですね。地下迷宮の天井から見下ろしたら面白いだろうなあ」

「うぬ。それは考えなかったで御座る。今度やってみて、スクリーンショット（SS）をブログにでも貼るで御座る。む、亭主。拙者にもこちらと同じ飲み物を頼むで御座る」

アルタイルが注文と同時に現れたグラスを大きな手で掴むと、

「遅れ申したが、テストご苦労だったので御座る。鳳牙殿」

椅子から落ちても手放さなかった鳳牙のグラスにチンと合わせてくる。

「ありがとうございます」

「さすれば、次はもう夏休みで御座るな。フェルド殿、拙者らはいつからが夏季休業であつたか？」

「え？ ああ、えっと」

服に付いた埃をパンパンと払いつつ、フェルドが中空を見つめる。鳳牙からは見えないが、今フェルドの前にはカレンダーが表示されているはずだ。

「今日が六日で海の日が十九日だから、今日を入れて後十四日だな。

鳳牙も同じじゃない？」

「そうですね。海の日からですから同じです」

「はいはいはい。小燕ちゃんもその日から夏休みでーす」

突然、元気のいい声が会話に混ざってきた。

三人そろってその声のした酒場の入り口へ視線を向けると、全身ごてごてのフルプレートメイルにフルフェイスのカクカクしいヘルメットまで装備した、それでいてものすごくちゃんまい背丈のキャラがビシッと右手を上げているが視界に入ってくる。

頭上には『小燕』というネームだけが白い字で表示されており、彼女もギルド未所属であることがうかがえた。

「うぬ。小燕殿で御座るか」

「きっかり十分だね。えらいえらい」

「小燕、そのバケツみたいな頭防具、何？」

アルタイル、フェルド、鳳牙が三者三様の返事を返すと、

「はいはい小燕ちゃんですよ。えへへ、褒められちった。バケツとは何だバケツとはー」

小燕から忙しく三通りの返事が返ってきた。

彼女うんしょんしょとヘルメットを取り払うと、ルビーのような紅い瞳をさらけ出す。髪の毛はポニーテールになっており、彼女が首を振るのにあわせて左右に揺れていた。まさに子どもといった可愛らしい顔立ちで、ぷっくりとしたお餅のような頬には、左側だけに薄赤の太線でデフォルメされた雲のような刺青が施してある。

「あー、何か喉かわいた。マスター、皆が飲んでるの頂戴。お酒だったら別のでいや」

注文と同時にカウンターに現れたグラスを取り、鳳牙は小燕に手渡してやる。

「ありー。んぐんぐ。あ、これ美味しい。でも結構高いなあ。お財布ががが。ま、狩りで稼げばいいんだろうけど」

グラスを見つめて眉をひそめる小燕。鳳牙はその態度に違和感を覚え、

「小燕。君、結構お金溜め込んでたよね」

「あ、うん。でも欲しいものの出来て使っちゃった」

「てへっ、と舌を出しつつ小燕が自分の頭をコツンと小突いた。

「欲しいもの？」

「そそ。御影^{みかげ}じーちゃんの銘入り防具一式ってか、今着てるやつ」
小燕がガシャガシャと音を立てながら自分の体を示してくる。よく見れば、その防具のデザインに鳳牙は見覚えが無い。

こんなデザインのプレートメイルがあったらどうかと鳳牙が首を

かしげていると、

「鳳牙殿のテスト期間中に武具追加のアップデートがあったで御座る。その様子では、まだ掲示板などを見てはおらぬようで御座るな」
アルタイルに言われて、鳳牙はそういえばとゲーム内から閲覧と書き込みが可能な専用掲示板の存在を思い出した。

個々人が様々な内容のスレッドを作成し、それに対して不特定多数の人がレスをつけていくことで連絡を取り合っており、ツリー形式で表示される。

鳳牙はもっぱら見て読む（ROM）専門で、物品の相場に関するものとモブ情報関係のスレッドをたまに閲覧している。

「その日のうちに御影さんが全部のレシピ見つけて、生産関係のスレッドに細かく書き込んでたよ。その中で僕らに関係ありそうなのが今小燕の着ている」

「各装備箇所ごとに魔法防御UPの効果が付いてるマジックプレートメールなのだ。この装備のおかげで小燕ちゃんの耐久性は当社比――二倍だぞー」

フェルドの言葉をかつさらった小燕は、がーと両手を顔の横に構えて歯をむき出しにしている。

「へえ、魔法防御が上がるのは美味しいな」

そんな小燕に微笑みながら、鳳牙はまじまじと新装備を着込む彼女を観察する。

小さい成りで重戦士を選択している小燕は、物理攻撃力と防御力において圧倒的な性能を誇るが、唯一魔法系統に対する脆さが難点だった。

物理系特化職業の宿命なのだが、それを装備品である程度克服出来るとなれば、小燕はまさに移動要塞の如き実力を発揮するだろう。
「あ、ちなみにこのマジックプレートメールって、フル装備時の防御力のうち三分の一はこのヘルメットに偏ってるんだよ。だからバケツとか言っちゃだめー」

「……………え？」

小燕の言葉に、鳳牙は一瞬言葉を失った。そしてまじまじと彼女の持つヘルメットを凝視する。

詳しい能力値はまだ分からないが、鳳牙の知識にあるプレートメイルの総合防御力を参考に計算して、その数値の三分の一がヘルメットに集中しているという事実には驚愕する。

「……うえ……」

「うぬ。気持ちは分かるで御座る。この偏りのせいで、頭だけそれを装備する効率重視の連中が増えたで御座る」

「狩場にあの頭だけで残りは裸の集団が現れた時はちょっとシールだったね。何処のホラーコメディーかと思ったよ」

フェルドとアルタイルがそろってしみじみと頷く。鳳牙としても想像するだにシールだ。とても酷い光景だろう。

「頭だけなんて邪道だよじゃどー。全部装備してこそ鎧じゃん。ま、全部そろえるとミスリルインゴット計百八個と各部位で一個ずつ玉鋼とダイヤモンドを使うから大変っちゃ大変だろうけどさー」

「え？ それミスリル製なのか？」

「うん。ほいこれ マジックプレートヘルメット<天之御影命>の性能」

小燕が言うや否や、喋った言葉と同じ文字が吹き出しと共に彼女の頭上に出現し、その一部が下線付きの直リンク文字として表示される。吹き出しは出現直後から徐々に透過されて消え始めていた。

鳳牙が吹き出しの直リンクに触れると、目の前に装備品の性能表が出現する。その材質の部分に、確かにミスリルという表記があった。

「ほんとだ。ミスリル製品だから耐久値も高いし見た目よりずっと軽い……ってか何だこのアーマークラス（AC）！ 五十・一とかどんだけだ！」

「他の部位はふつーよかちよつと硬めかな。えっと マジックプレートキュラス<天之御影命> マジックプレートスポールダー<天之御影命> マジックプレートガントレット<天之御影命>」

新たな吹き出しの中に三つのリンクが張られる。文章量に制限があるので、小燕がそこで一度文章を切って、

「んでー、マジックプレートフォルド<天之御影命> マジックプレートタセツト<天之御影命> マジックプレートグリーブ<天之御影命> いじょー」

残りを新たな吹き出しとして出現させた。

鳳牙は小燕の頭上に羅列される装備の性能を順次確認して行き、段々と渋い顔になる。

「えっと今こうだから最後にこれを足して……………合計百五十三・七……………だと？ 最大強化オリハルコンプレートで固めても最高百三十一・四だつてのに……………これ強化したら何処まで行くんだよ」

「あー、強化出来ないよこれ。残念だけどさすがにそういうバランス調整ががが」

「強化出来れば壊れ性能だっただけどね」

「うぬ。すでに壊れた性能と見る事も可能で御座る」

それぞれが新装備の性能に関して感想を述べていく。

と、続けてアルタイルが、

「拙者としては回避の性能が上がる『疾風の指輪』が欲しいところで御座るが……………」

鳳牙の知らないアイテム名を口にし、彼の興味はそちらへ移る。

「アルタイルさん。その指輪も新装備ですか？」

「うぬ。指の装飾品で御座つてな。今拙者の装備している風の指輪が回避+五の性能で御座るが、疾風の指輪は回避+九の性能があるで御座る」

「うつわ。それは回避マニアとしては手に入れたいですね」

鳳牙の言葉に然りとアルタイルは大きく頷き、しかし直後にしょんぼりした顔のエモートを出現させると、腕を組んで唸り始めた。

「どうしたんですか？」

「うぬ。実は製作に必要な『風雲石』の持ち合わせが一つしかない故、残り四個をどうにかして集めねばならなので御座る」

「『風雲石』ですか？ 確か俺が最後にログインした時に御影さんに渡そうと思って野良PTのドロップ分配でそれ選んだような……えっと、ちょっと待って下さい」

鳳牙は強面のバーテンへ向き直ると、メニューから銀行を選択してアイテムボックスを開いた。

緑色の鉱石アイコンを選択し、自分の持ち物ボックスへ移動させ、銀行ウィンドウを閉じる。

「ほら 風雲石 これですよ？ 何の因果か四つあるんですけど」「……おおっ！」「」

鳳牙がリンクを貼って見せると、フェルド、小燕、アルタイルの三名がそろって驚きのエモートを出現させる。

「鳳牙殿。して、いくらにてお譲り頂けるで御座るか？」

「え？ いやいいですよ。俺が持つてても御影さんにあげるくらいですし、せつかくだから使って下さい」

鳳牙はそのままアルタイルをターゲットしてトレードコマンドを実行する。

「む。待つて御座る。貴殿にとって不用品なれど、それは確かにレアドロップで御座る。対価も無しに受け取るわけには行かぬで御座る」

「んー……じゃあ、何か欲しいもので来た時に手伝ってくれればいいですから。先行投資って事ではどうです？」

「うぬ。しかし……」

鳳牙はすでにアイテムをセットして了承のボタンを押している。

しかし、アルタイルの決心がつかないためにトレードウィンドウが開きっぱなし状態だった。このままでは数十秒で自動的にキャンセルがかかってしまう。

「いいんじゃないか？ アルタイル。好意は素直に受け取るものだよ？」

「くーっ。さすが鳳兄。あたしたちが出来ない事を平然とやってのける。そこに痺れる憧れるう。いいなー。あたしもなんか欲しー。」

具体的にはお金欲しー」

外野がやんややんやと後押しするが、それでもアルタイルは迷っているようだった。

これでこのままキャンセルがかかってしまうと、もう一度トレードを申し込むはかなり微妙である。さてどうしたものかと鳳牙は考えを巡らし、

「……そうだ。アルタイルさん」

「うぬ？」

「もしも俺が今これを持ってなくても、どうせみんなで狩りに行って揃えようって事とかになるんでしょから、早いか遅いかの違いだけじゃないですか？」

かなり苦し紛れだと鳳牙自身自覚もあるが、とにかくにも受け取ってもらいたい気持ちに変わりはない。宝の持ち腐れにするよりも、必要とする人の元に渡ってこそそのアイテムだ。

「……うぬ。鳳牙殿の気持ち、確かに受け取ったで御座る」

その言葉と同時にトレードウィンドウは閉じられ、無事トレードが終了した旨のアナウンスが流れる。

「しかし、この恩はいずれ必ず返すで御座る」

「期待してます」

無事受け取ってもらえた事に、鳳牙は内心で胸を撫で下ろす。

「うぬ。しからは御影殿に連絡を取る故、しばしだんまりで御座る。ついでに鳳牙殿の件も伝えるで御座るよ」

「え？」

「了解」

「はいよー」

鳳牙のみ疑問符を返し、フェルドと小燕はそのまま受けた。

どういう事かと鳳牙がフェルドに視線で問いかけると、

「御影さんから鳳牙がロゲインしたら連れてくるように言われてたんだよ。いつも通りここに集まったのはそういう理由もあっての事ってわけ。ここが一番御影さんの工房に近いからね」

「なるほど。でも、御影さんが俺に何の用なんですか？」

「さあ？ 僕らも連れてくるようにしか聞いてないんだ」

フェルドが慣れた仕草で肩をすくめ、ついと眼鏡の位置を直した。
「あたし的にはきつとサプライズな何かがあると見てるわけですよ」

「……サプライズ、ねえ」

鳳牙は左目に古傷を持つ巖のような男を思い出す。気に入った相手としか取引をしない職人気質な人が、はたしてサプライズなど考えるだろうか。

少なくとも鳳牙の記憶に残る人物は、そういった趣向を凝らす人間ではなかった。

なににせよ行ってみれば分かるか。

そう結論付けて、鳳牙はぐいっと体を伸ばし、パタパタと尻尾を揺らした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8274y/>

Chaos_Mythology_Online

2011年11月24日18時50分発行